

山本 博史 教授

地域創造学部 地域創造学科

Hiroschi Yamamoto

[interview : 八木 真奈美 / 齋崎 達也 / 酒井 智広]



1982年から追手門学院大学非常勤講師。85年より専任教員として本学に赴任。人間学部長などを経て、2015年4月より地域創造学部副学部長。専門はカント哲学。学外でもさまざまな委員を務める“世話人”。実地での体験・学びを重んじる。趣味はトランペット。

より多くを学ぶために、 より多くの挑戦と失敗を。

**地域の新たな価値を創造し
持続可能な社会へと導く**

この春から、本学の新たな学部として「地域創造学部」がスタートした。

「地域創造」を掲げる学部の創設は、全国の私立大学で初めてのことだと思えます。だから、まだまだ聞き慣れない学部名称で、何を学ぶための学部かイメージしにくい他学部生も多いかもしれませんね。学びのベースとなる考え方をひとことと言えば、「持続可能な社会」。どうすれば暮らしやすい国・社会であり続けられるかを問い、究め、実社会でその役割を担える知恵と術を身につけていくための学部です」。

学科による区別はなく、「地域経済・事業創造コース」「観光・まちづくりコース」「都市文化・文化創造コース」の3コースから成る。いずれも都市部または地方で、地域をどう活性化していくかがテーマとなっている。

「本学のある茨木や北摂地域、京阪神エリアが主な研究・活動の場になっていきますが、ここにも都市部から小さな集落まで、

さまざまな生活圏があります。例えば北摂地域の人口密度を比較して見ても、豊中・高槻は約1万人/km²ですが、豊能郡能勢町は約1000人/km²と大きな差があるように、課題Ⅱ学ぶための場は身近なところにいくつもあります」。

「地元地域」を視점에経験を積みながら、課題の多様性を知り、新たな視点を得るために、他の地方へも積極的に出掛けて交流を図っていく。

「先日訪ねた岡山県真庭市などは、とてもうまく地域創造できている所でしたね。森林資源を活かしてエコ燃料と言われるバイオマスの事業を軌道に乗せる一方で、のれん街として街並み保存がなされている勝山をはじめ、観光スポットも工夫・整備されている。また蒜山高原では山葡萄を原料にワイン造りが行われ、立派な名産品となっている。このように、その土地の持つ良さを新たな価値といえるレベルにまで引き上げる、さまざまな取り組みが見られました。ここはひとつの成功例だと思えますが、より多くの場所フィールドワークやプロジェクト型学習、インターンシップなどの実践的な学びを重ね、卒業後、望む分野で即戦力として力を発揮できる人へと育ててもらいたいですね」。

**そこで何を感じたかが
学びの起点となっていく**

新学部で担当する授業のひとつでは、大阪の上町台地を研究・活動のフィールドとしていく予定だ。

「上町台地は、北は追手門学院発祥の地である大阪城から南は天王寺までつくくエリアで、いわば「元・地元」。その歴史・文



化を再発見しよう」と、5年間にわたって「上町学プロジェクト」に取り組んできました。大阪市内にありながら、古くからの街並みや暮らしがまだまだ残っていて、路地も多く、歩いてみると生活の音や匂いを感じ取ることができると言います。そんな街の古き良き部分を残しながら、空掘商店街のように若者たちが元の建物を活かしながら店やギャラリーを開くなど、新たな動きも絶えずあつて、ネットワークやコミュニティもしっかりと形成されています。とても学ぶべきことの多い面白い街だと思えますね」。

そしてもうひとつ、新しい形で行われる授業を予定している。

「伊丹市の高校生と共に学ぼうと考えています。生徒たちが授業で、近隣のお年寄りのお宅を巡回する活動や、地元商店街の活性化などのボランティアに取り組んでいるので、そこに参加させてもらおうと。高校生とはいえ、代々上級生が下級生を指導していくので、チームワークが良く、考え方もしつかりしているんです。だからおそらく、高校生から教わる、という感じになるはずですね。学ぶ教わる、には、年配の方から、というイメージがあるかもしれませんが、年下から教わることもあつてもいい。社会へ出れば、そんな場面はよくあることです」。

スタッフの視点から

「持続可能な社会」について考える地域創造学部。これは、自分の住んでいる地域を、より魅力的に感じられる学部だと思えます。それぞれの土地の持つ良さを発見したい、そしてそれを事業として発展させたいという方にはおすすめです。と感じました。(八木 真奈美)